

“知っていれば怖くない” BSE

いよいよ米国産牛肉の輸入が始まりました。輸入再開時にはあれほど大騒ぎだったのがウソのように新聞もテレビも静かになって来ました。本誌が読者のお手元に届くころには、既に米国産牛肉をメニューに載せているお店もあるかと思えます。しかし、いったん消費者に植え付けられた「BSEは怖い」とのイメージはなかなか消すことは難しいのではないのでしょうか。

しかし、本当にBSEは怖いものなのでしょうか？ このところ吹きまくったBSEの嵐にすっかり振り回されてしまった我国の行政機関、食肉、外食産業、そして消費者ですが、BSEの実情をしっかりと認識・把握した上で意見を述べ対応をしてきた団体や業界人がどれほどいたのでしょうか？ 実像をよく理解されないまま「とにかくBSEは怖いもの」ということだけが、一人歩きしてしまい、結果として多くの関連業界や皆さんの様な焼肉店の方々に多大の影響を与えてしまいました。今回は、BSEの実態をきちんと解明することによって「本当のところBSEは怖くないんだ」「不必要に恐れることはないんだ」という事を中心にレポートして行きたいと思えます。

「BSE、BSE」と騒がれていましたが、まずBSEとは「牛」の異常プリオン病であることを理解しましょう。つまりBSEは人間の病気では無いのです。今まで「BSEは怖い」といつてきた人達は「牛の病気」と「人の病気」をごちゃまぜにして不安感をあおってしまったと言ってもよいでしょう。

人間に係わりがあって本当に怖いのは変異性ヤコブ病(vCJD)といわれる異常プリオンが引き起こす病気です。ヤコブ病自体はパプアニューギニアなどで発生していたクールー病という難病の一つが昔から知られており、この潜伏期間は平均12年とされています。この病気は、一昔前は痴呆を引き起こす謎の風土病として恐れられていました。患者はほとんどが女性で、その原因は食料不足による食人習慣による異常プリオン病と分かったのは最近の事です。男性は狩に出かけてイノシシ等の肉を食べられたので患者が非常に少なかったのです。

日本で最初にヤコブ病がクローズアップされたのは、1987年に米国食品医薬品局(FDA)が脳硬膜移植に対して感染警告を出した以降です。その後人工硬膜の使用などでこの問題は話題に上らなくなりましたが、かわりにBSEが蔓延した英国で特定危険部位を含む牛肉を食べた人たちに若年性のヤコブ病(vCJD)が発見され大騒ぎになりました。

我国でも 2001 年 8 月に乳牛で BSE が発見され大変な問題になった事を苦い思いでご記憶の読者もいるかと思えます。国内で発生している BSE はもはや新聞の三面の片隅に追いやられているので本年 8 月発生で 28 例になった事をご存知な読者は相当情報通かと思えます。それも全てホルスタイン等の「乳牛」でほとんどが通常は焼肉で使用しない 4 歳以上の経産牛です。(米国では 3 例、オースト・NZ はゼロです) なぜ経産牛に発生しているかという、月齢が高いのもありますが BSE の原因を言われている肉骨粉は禁止前に主として乳牛に食べさせていた事が原因と考えられます。肉牛には肉骨粉を食べさせる必要がほとんど無かったのです。

また、約 3 年前に我国で 23 ヶ月と 21 ヶ月のホルス去勢牛で BSE と診断された例がありましたが、非定型的な BSE と報告されています。つまり、狂牛病(真性の BSE)を引き起こす異常プリオンとは「少し違う型の異常プリオン」です。これらは病理組織学的検査でも免疫組織学的検査でも陰性と判断され、マウスを使って伝達性を確認試験では「今までの試験では伝達性は認められない」というのが実態です。

国際機関の OIE (国際獣疫事務局)の何人かの関係者によると「他国の専門家から本当に BSE だったのか?」との疑問の声があがっているとの事ですが、日本は大々的に発表した手前もあり「振り上げた拳を簡単には下ろせない状況」との事。国際的に見れば、BSE はほとんど焼肉材料に使用されることのない「経産牛」からのみ発見される牛の病気である事をご理解いただけたかと思えます。

また、過去 BSE 牛が 3 頭発生したアメリカですが、2003 年 12 月輸入禁止の原因となった第 1 例目の BSE 牛はカナダ生まれの牛である事がハッキリしておりますし、最新情報では、それ以降発生した 2 例目・3 例目も非定型 BSE つまり 真性 BSE と少し異なる可能性が高いとの指摘もあり、もしこれらが非定型 BSE であれば結局は米国で生まれた牛に真性 BSE の牛は無かった事になります。これは日本での 28 頭(内 2 頭は非定型 BSE) カナダの 9 頭や英国の 18 万頭を比べても大変少ない発生数という事がお分かりいただけたかと思えます。

ところで、人間の病気である vCJD(変異性ヤコブ病)の現状はどうなっているのでしょうか。過去最も患者の数が多き英国では 2000 年の 28 人をピークに減少しはじめ昨年 2005 年には 5 人の患者が報告されており、本年 7 月末では 3 人となっております。英国ではもともと牛の脳や脊髄を食べる事やハンバーグなどにこれらを混ぜたりしたため、161 名の患者が発生しました。この数字と日本(英国滞在の患者 1 名)やアメリカ(在住英国人患者 2 名)の数字を比べてみてください。日本やアメリカが非常に安全な事がお分かりいただけたかと思えます。結論をいいますと、vCJD に感染するのは、「BSE 牛の特定危険部位食べた人だけに可能性がある」という事です。正しく処理された牛肉やタンなどからは感染しないのです。

日本がいつも強く要求している全頭検査についても現在 20 ヶ月齢以下の牛では、異常プリオンは検出されないレベルであり、すでに 20 ヶ月齢以下はわが国でも検査しなくても良い規定になっているのに、いまだに各都道府県で無駄な税金が投入されております。繰り返しますが肉用牛では、真性BSEは全く発生していないにも関わらず、政治判断で決められた科学的な根拠のない全頭検査により、得をしているのは検査キット販売会社だけという状況なのです。それに引き換え、無駄な検査時間や労力が強いられている検査官や、結果的にその税金やコストを負担している消費者・焼肉業界が膨大な損をしているといっても過言ではありません。

現実に日本でvCJDに感染するリスクは、専門家によると1億3千万人で0.026人といわれております。そして、米国では日本よりさらにリスクが小さく、日本の20分の1と考えられています。その結果日本では0.026人のリスクに対して何千億円もの税金が使われているのです。世界中を見回しても、これだけ膨大な費用をほとんどゼロに近いリスク対策に費やしている国は日本だけです。安全にはコストがかかるものとはいえ、これには首をひねらざるをえません。

米国人は一人あたり40kgの牛肉を年間に消費します。過去にBSEが蔓延したEU諸国でも同20kg、日本人は約10kgです。それにもかかわらず、これら日本以外のほとんどの国では国際基準(OIE基準)の30ヶ月未満はBSE検査をしなくても良い事になっています。

現在米国より輸入されているのは、米国の消費者が食べている牛肉の基準に比べて、非常に厳しい、言い換えると世界一厳しい日本基準で輸入されている事をまず理解する事が肝要です。先日、畜産業界誌(ミートジャーナル)主催で米国産牛肉のリスクについて専門家を交えて座談会を開催されました。BSE問題についての詳細が多く述べられておりますので、読者の中で、さらにご興味のある方はミートジャーナル9月号をご覧ください。筆者としては、実態を知らない多くの人たちの不毛な輸入反対論に惑わされずに経営者自身として従業員の方達にも、BSEとvCJDについての正しい認識をもって頂きたいと思っております。

ミートジャーナリスト・コンサルタント

高橋 寛